

ヨエル書とラオデキヤのセブンスデー・アドベンチスト教会 — 第三十七号

Jeff Pippenger

2026-01-29

第三十七

ウィリアム・ミラーの夢において、冒頭の「騒ぎ」-人々が宝石をかき乱し始めた時に先立ち、ミラーは宝石を集め、「来て見よ」と呼びかけていた。塵払いの男としてのキリストは、箒を用いて塵芥を掃き出し、はるかに大きな宝石箱に宝石を集め、それからミラーを「来て見よ」と呼んだ。キリストが箒による働きを始めるとき、その部屋は空である。というのも、ミラーは次のように記しているからである。「戸が開き、一人の男が部屋に入ってくると、人々は皆そこを立ち去った。そして彼は手に塵払いを持ち、窓を開け、部屋から塵と屑をはらい始めた。」

すべての者がそこを立ち去ったのち、塵払いの男はその部屋に入る。2023年、十四万四千の運動が打ち砕かれ、散らされていたため、塵払いの男は空の部屋に入った。2012年のハバククの表によって示されていた諸真理は塵芥に埋もれており、部屋は空であった。塵払いの男とは、バプテスマのヨハネの後に来られた方であり、その方についてヨハネは、その手に箕があり、その箕をもってご自分の打ち場を徹底的に清められると言った。

私はまことに、あなたがたに悔い改めのために水のバプテスマを授ける。しかし、私の後から来られる方は私よりも力ある方で、私はその方の履物をお持ちするに値しない者である。その方はあなたがたに聖霊と火によるバプテスマをお授けになる。その手には箕があり、ご自分の打ち場を徹底して清め、麦を倉に集め入れ、もみがらを消すことのできない火で焼き尽くす。そのとき、イエスはガリラヤからヨルダンへ、ヨハネのもとに、彼からバプテスマを受けるために来られた。マタイによる福音書 3:11-13.

ガリラヤは転換点の象徴であり、イエスがバプテスマを受けに来られたヨルダン川の地点はベタバラと呼ばれ、その名は「渡し場」を意味し、そこは古代イスラエルが約束の地へ渡った場所を指し示している。イエスがバプテスマを受けられたとき、イエスはイエス・キリストとなられた。ガリラヤ、ヨルダン川、ベタバラ、そしてイエスがキリストとなられたことは、いずれも経綸の転換を強調しており、これはまた門が象徴するところでもある。とりわけ、開閉する門の鍵を与えられているフィラデルフィアの者たちにとってはそうである。

フィラデルフィアにある教会の御使いに書け。聖なる方、まことの方、ダビデの鍵を持ち、開けば誰も閉じることができず、閉じれば誰も開くことができない方が、こう言われる。わたしはあなたの行いを知っている。見よ、わたしはあなたの前に開かれた門を置いた。誰にもそれを閉じることができない。あなたにはわずかな力しかないが、わたしの言葉を守り、わたしの名を否まなかったからである。ヨハネの黙示録 3章7、8節

キリストが「戸」を「開き」、「部屋に入った」とき、その部屋は「ご自身の部屋」であった。なぜなら、彼は「ご自身の打ち場」を徹底的に清めるからである。もしそれがご自身の打ち場であるなら、それはご自身の部屋である。

カペナウムでは、イエスは各地を歩き来する旅の合間に滞在され、そこは「ご自分の町」として知られるようになった。そこはガリラヤ湖の岸辺にあり、ゲネサレの美しい平原の境に近く、実際にその平原の上に位置していたのかもしれない。The Desire of Ages, 252.

彼はご自分の麦を集め、また毒麦を集めて焼き払うために、ご自身の部屋に入られる。ガリラヤ、ヨルダン、ベタバラ、バプテスマ、ヨハネからイエスへの移行によって象徴される経緯の変化は、ラオデキアの戦う教会からフィラデルフィアの勝利の教会への移行と符合する。彼は2023年7月にその部屋に入られた。ミラーは2020年7月18日の喧騒のただ中で目を閉じ、そして目を開けると、部屋には人影がなく、真理は誤謬の下に埋もれていた。そのとき、塵払いの男が窓を開け、塵芥を掃き出し始めた。

「『手に箕を持っておられ、打ち場を徹底的に清め、麦を集めて倉に納められる。』マタイ3章12節。これは清めの時の一つであった。真理の言葉によって、もみ殻が麦からふるい分けられていた。戒めを受け入れるにはあまりにも虚栄と独善に満ち、謙遜な生活を受け入れるにはこの世を愛しすぎていたため、多くの者がイエスから離れていった。今もなお多くの人が同じことをしている。今日も魂は、カペナウムの会堂にいたあの弟子たちのように試されている。真理が心に迫ると、自分の生き方が神の御心になんていっていないことが見えてくる。自分自身が全く変えられる必要を悟るが、自分を捨てる務めを引き受けようとはしない。だから、自分の罪が明るみに出ると怒り、弟子たちがイエスから離れたときのように、つまずいて去って行き、『これは聞きにくい言葉だ。だれがそれを聞いていられようか』とつぶやく。」『The Desire of Ages』392頁。

2023年の末日、すなわち2024年の第一日に接するその日に、ユダ族の獅子は、ご自身の啓示の封印を漸次解き始められた。ダニエル書十二章の封印が解かれることに伴う三段階の試練の過程に則り、その後、三つの試練があり、それは「清められ、白くされ、試される」として表される。

彼は言った。「ダニエルよ、あなたの道を行きなさい。これらの言葉は終わりの時まで閉ざされ、封印されている。多くの者は清められ、白くされ、試される。しかし、悪しき者は悪を行い、悪しき者のうちには悟る者がいない。だが、賢い者は悟る。」ダニエル書 12:9、10

第一の天使は、罪の確信に至った罪人が外庭で自らの罪をいけにえに負わせ、そこで血によって義とされるように、清めを象徴する。

その血は次いで聖所に携え入れられ、そこでは、聖性の聖化過程が、外庭からの血による洗いを通して白くされるものとして表象されている。義は、そこで、その血と彼らの証しの言葉によって打ち勝つ者たちのうちに顕現する。

その後、彼らは試され、終末の時には、彼らがバビロンのほかのすべての知者たちより十倍も優れていることが見出される。第三の試練は、至聖所において彼らが栄化され、賢者を自称する別の階級と峻別される場所である。その第三の試練は日曜法であり、第一の試練は、次の段階で神殿が建てられるゆえに、根基に立ち返れとの第一天使の召しである。次のその段階とは第二天使の分離のメッセージであり、その後第三天使の試金石が続く。

2023年、第一の天使は、1840年8月11日に彼が第二の災いに関するイスラムのメッセージを携えて降りて来たときと同様に、到来した。また、9/11にそうしたとおりに、第三の災いに関するイスラムのメッセージと古き道に立ち帰るようにとの呼びかけを携えて降りて来た。第二の災いのメッセージが1840年8月11日に成就すると、ミラー派の歴史の基礎が据えられた。その後、黙示録第十章の天使が降臨し、こうして、黙示録第十八章の天使の降臨と第三の災いの到来を予表した。

ヨシヤ・リッチは、1840年8月11日に礎が据えられたことに関連づけられる歴史上の人物である。「ヨシヤ」という名は「神の礎」を意味し、聖史における王ヨシヤは、彼の改革を象徴している。その改革には、聖所の塵芥の中に埋もれていたモーセの呪詛の発見が含まれており、ちょうどミラーの宝玉が部屋の中に埋もれていたのと同様である。

ヨシヤ王はメギドで死んだ。すなわち、そこはヨハネの黙示録第十六章にいうハルマゲドンである。ヨシヤの宗教改革は、ヤロブアムがベテルとダンに二基の祭壇を設けたときに、不従順な預言者によって告げられた預言の成就であった。その不従順な預言者は、ろばと獅子との間で死んだ。ヨシヤ王は名指しで予告されており、その宗教改革もまたその予告の一部であった。すなわち、将来のヨシヤ王が、その不従順な預言者が邪悪な王ヤロブアムに対峙したまさにその祭壇を打ち壊すであろうことが含まれていた。

ヨシヤとは「神の礎」を意味し、ヨシヤ王はその治世のおよそ三百四十年前に与えられていた預言を成就した。彼は信仰の復興と改革を先頭に立って推進し、ついには、ユダから来た預言者がヤロブアム王に対峙したあの祭壇にまで至った。そこに至るや、ヨシヤは預言が告げていたとおり、その祭壇を打ち壊した。ヤロブアムの二つの祭壇は、エルサレムの神殿を模した意図的な偽造物であり、ヤロブアムが偽の祭日を制定するに至るほど周到であった。こうすることによって、彼は、金の子牛に関してアロンが行ったことを単に繰り返していたにすぎない。アロンの反逆は古代イスラエルの聖史の礎に位置している。それは、神の統治の礎である律法をモーセが受けていた時に起こった。

アロンの反逆は土台となる反逆であり、ヤロブアムが北の十部族からなるイスラエルを樹立したとき、それは再び繰り返された。モーセはアロンを叱責し、モーセはアルファ、すなわちオメガたるキリストに対する土台である。アロンとモーセは、その土台となる反逆における二つの類型を表し、第三の類型はモーセの側に立った英雄、すなわちレビ人である。北王国の土台となる反逆においては、王ヤロブアムとユダから来た預言者が二つの類型であり、そして再び英雄はレビ人である。

ヤロブアムの反逆の創始に際して、ユダから来た預言者が彼を戒め、「神の礎」と名づけられる王、すなわちヨシヤについて預言した。予言された改革の成就には、ヨシヤが復興と改革を開始したときにモーセの呪いが見出され、さらにモーセの聖なる言葉の朗読

が、すでに始まっていた復興と改革に力を与えたという事柄が含まれていた。明らかに預言的象徴であるヨシヤは、モーセの著作にある預言が見出されるときに力づけられる復興と改革を表している。

ヤロブアム王の物語における根本的叛逆は、イスラエルの王によって、また、ヤロブアムの根本的叛逆に対する神託と、ユダへ帰る際に避けるべき道を預言者に示す命令とを携えて遣わされたユダからの預言者によっても、象徴されている。ユダからのその預言者は、滞在を求めるヤロブアムの要請を退けたが、その後、ベテルの偽りの預言者の招きには応じ、自らの運命を確定させた。不従順なその預言者は、ろばと獅子の間で死に、その後、偽りの預言者の墓に葬られることになる。

1840年8月11日、第二のわざわいの預言が成就し、アドベンティズムの基礎が据えられた。ジョサイア・リッチは1838年にこの預言を発表し、その後、1840年8月11日の10日前に自らの計算を精緻化して、第二のわざわいに関するイスラムの預言の成就として、1840年8月11日をオスマン帝国の覇権が終わる日であると予告した。

ヨシヤ王は最終のリバイバルと改革を象徴する。すべての預言者は、以前のいかなる時代についてよりも、終わりの日について、より直接的に語っているからである。ヨシヤ王は最終のリバイバルと改革を象徴し、その改革は予言によって聖書に示されている。ヨエル書は、十四万四千人となる者たちの間で起こる最終のリバイバルと改革を指し示している。ヨシヤのリバイバルは二つの段階から成っていた。まずそれは始まり、その後、その働きに勢いを加える預言の封印が解かれた。その二段階とは、ヨエル書に示されている初雨と後の雨であり、使徒行伝において成就し、さらにミラー派の歴史において再び成就した。

アロン、ヤロブアム王、およびユダから来た預言者の根本的叛逆において、そこからヨシヤ王へ、さらにヨシヤ・リッチへと至るまで、基礎の試験に関する証言の系統が見いだされる。基礎の試験は第一の試験であり、それに続いて、冠石が据えられるときに神殿の試験がある。その後、第三の試験、すなわちリトマス試験が到来する。

金の子牛に始まり、ベテルとダンにおけるヤロブアムの祭壇、ヨシヤ王、そしてジョサイア・リッチへと至る一連の歩みは、9/11における土台を問う試練へと導く預言的な足取りの連続を表している。9/11にニューヨークの大いなる建造物が崩れ落ちたとき、第三の災いに関する預言がその試練を特定し、それが古き基礎の道筋への回帰を求めていることを示した。というのも、1840年8月11日と9/11の並行関係は、見ようとするラオデキヤ的なセブンスデー・アドベンチストであれば誰にでも見て取れたからである。概して真実である陰謀論が横行するこの時代には、9/11におけるアルカイダの関与がしばしば疑問視されるが、アルカイダとは「基礎」を意味し、彼らは1989年の「終わりの時」の一年前、すなわち1988年8月11日に組織として発足した。

基礎の預言的象徴に関するこれらの細部が看過されるなら、多くが失われる。9/11に、第一段階として基礎が据えられた。第二段階では、冠石が据えられて神殿が完成する。第三段階は、日曜法における戸の閉鎖である。9/11から日曜法に至るまで、そのメッセージは主としてラオデキヤ的セブンスデー・アドベンチストに向けられている。なぜなら、裁きは神の家から始まり、神の家に関するそれは日曜法において終結するからである。その時

その場において、ラオデキヤ的セブンスデー・アドベンチズムは退けられる。ちょうど、ミラライトの歴史におけるプロテスタント、キリストの時代におけるユダヤ人、そしてモーセの時代に四十年のあいだに死に絶えた者たちがそうであったように。

9/11の第三のわざわいは、1840年8月11日の第二のわざわいによって予表されており、その次元においては、両方の道標は、聖書予言におけるイスラムの第一の象徴であるろばによって表されている。日曜法は獣の刻印であり、その獣はしばしば獅子として表され、このようにしてユダ族の獅子を偽って模倣している。日曜法は獅子であり、ユダから来た不従順な預言者は、ろばと獅子との間で死に、ベテルの偽りの預言者と同じ墓に葬られた。彼は、9/11から日曜法に至る預言的期間、すなわち、ろばから獅子に至る預言的期間に死んだ。その試練の期間は、ベテルの偽りの預言者の墓であり、その者はユダから来た不従順な預言者を自らの墓に葬ったのである。

エルサレムと神殿を擁するユダ王国の模造として表象されるヤロブアムの王国は、ミラー派の歴史におけるプロテスタントを象徴していた。彼らはもはや神の民ではなかった。彼らは、1840年8月11日から1844年10月22日の戸の閉鎖に至るまでの間に、その契約上の身分を失った。その歴史は9/11から日曜法に至るまでの時期と符合しており、このゆえに、ユダの不従順な預言者は、ベテルの偽りの預言者によって表象されていた背教したプロテスタントと同じ墓に葬られている。

概して、ヨシヤ王は善王であったが、メギドで死んだ。これはハルマゲドンへの明白かつ直接的な適用である。彼は、エジプトの王ネコの警告の言葉を退けることによって道を踏み外した。エジプトの王、すなわち南の王であるネコは、北の王たるバビロンと戦うために向かう途上にあった。ヨシヤは、ダニエル書11章40-45節における南の王と北の王の戦いに関する警告のメッセージを拒否したためにハルマゲドンで死ぬユダの民を表している。そのメッセージは9/11において基礎となった。

第一の試練は、根基に立ち返るよにとの第一の御使いの呼びかけである。

第二の試験とは、第二の天使による分離と神殿の完成への呼びかけである。

第三の試験とは、第三の天使の、印または刻印をめぐるリトマス試験である。

最初の試練は根基に関する試練であり、2024年には、安息日のZoom集會に携わっていた人々の約半数が、1843年の図表に示されている唯一の教理上の論争点をめぐって離脱した。その論争は、終わりの時における神の民の幻を確立する象徴をめぐるものであった。ミラー派をめぐる論争においては、プロテスタントは、ダニエル書11章14節において「幻を確立するために」自らを高めて倒れる勢力は、アンティオコス・エピファネス、あるいはイスラームであると主張した。

また、そのころには多くの者が南の王に逆らって立ち上がる。さらに、あなたの民の略奪者たちも、幻を成就させようとして高ぶる。しかし、彼らは倒れる。ダニエル 11:14。

イスラム、あるいはアンティオコス・エピファネスがあなたの民の略奪者であったのか、それともミラーが指摘したようにローマであったのか。ミラーは、異教と教皇制という

荒廃させる諸権力はいずれも、自らを高め、やがて倒れ、神の民を略奪したその権力であると理解していた。その論証を表す図像は、「神の御手により指示され、変更してはならない」とされた図表に掲げられており、預言の御言葉に直接の言及をもたない出来事を特定しているものとしては、ハバククの板のいずれにおいても唯一のものであった。図表上のその記載は、神の預言の御言葉の分離の力の象徴として、その根本的論証を強調するためのものであった。

2024年、Zoomグループの約半数が、幻を成就させるのはローマではなくアメリカ合衆国であるという誤った理解ゆえに離脱した。これは、ミラー派が実に的確に弁証したとおり、幻を成就させるのはローマであるという立場に反する。

2023年に始まった清めは、キリストが御自分の箕を携えてその部屋に入られたときに始まった。この箕とは、主の真理の御言葉である。主が御自分の部屋に入られたとき、そこは無人であったので、主は、主の道を備えるために、荒れ野で叫ぶ者の声を起こされた。その声は、契約の使者が突然その宮、すなわち十四万四千の彼の宮に来られる道を備えるためのものであった。

そして2024年には、第一の試練、すなわち土台の試練、残りの者に封印を施すその異象を誰が確立するのかという試練がある。残りの者に封印を施す内的異象は第十章におけるキリストの異象であり、外的異象は反キリストによって確立される異象である。そして反キリストとはローマである。内的にはキリストの異象、外的には反キリストの異象である。封印とは、霊的にも知的にも真理に堅く据えられることであり、第十章の内的異象は霊的なものであり、第十一章の外的異象は知的なものである。両異象の理解とそれに対応する経験は、封印を受けようとする者すべてに求められる必須の基準であり、これはダニエル書第十章第一節においてダニエルが示している。

ペルシアの王クロスの第三年に、ダニエル、すなわち名をベルテシャザルと呼ばれた者に、一つの事が示された。その事は真実であったが、その定められた期間は長かった。彼はその事を理解し、幻を悟った。ダニエル書 10:1。

基礎に関するアルファの試練はダニエル書十一章十四節をめぐるものであり、それはミラー派における同じ基礎的試練と並行していた。そしてその試練は、ハバククの見張り人が「書き記し、明らかにせよ」と命じられた板に表象されている、ミラー派史の中で唯一の論争であった。2024年の基礎的試練は、1840年8月11日、1888年、および9/11によって表象されるように、第一の天使の降下であった。

その天使はまたミカエルとしても降臨した。というのは、ミカエルこそがモーセを復活させた者であり、モーセはエリヤと共に2023年の最後の日に復活させられたからである。その復活は、エゼキエルによって、四方の風の預言によって成し遂げられるものとして表象されており、ホワイト夫人はそれを「怒りを抑えられた馬」と呼び、それは1840年8月11日および9/11のイスラームである。アルファの試験は、基礎を検証する外的幻視であった。オメガの試験は、内的な頂石の幻視となるであろう。

なぜアルファとオメガがあり、さらに第三の試験が続くのか。これこそが私が指摘している問題である。2024年のアルファ外的試験の幻視は、三つの試験の第一である。その基礎

的試験に合格しなければ、オメガの頂石たる試験に参与することはできない。これら二つの試験は、第三の試験とは異なる予言的性質を有している。第三の試験は、候補者が先の二段階を真に通過したかどうかを証明する試金石である。

第一のテストは礎であり、第二のテストは完成した神殿である。バビロンから出るための第一の勅令の歴史において、神殿の礎が据えられた。第二の勅令の歴史において、神殿は完成した。第三の勅令は異なっていた。というのも、その勅令においては、ユダの国家主権が回復され、世俗的および宗教的犯罪を訴追する権限が彼らに与えられたからである。裁きは第三の勅令において回復される。2024年、基礎となるアルファテストが、塵払いの男のほとんど空の部屋にいる者たちをより分けた。

オメガの試練とは、頂石が据えられることによって象徴される、神殿が完成する段階のことである。神殿の完成とは、毒麦が取り除かれるときに確立される凱旋の教会を指す。ミラーの夢における神殿の完成は、宝石が「それらを投げ入れた男には、目に見えるいかなる労苦もなく」より大きな宝石箱に投げ戻されたときであった。ミラーが、より大きな宝石箱に宝石を投げ入れていたのがそのちり払いの刷毛を持つ男であることを認めたと後、彼は次の言葉で自らの証言を結んでいる。「私は非常な喜びのあまり叫び、その叫びで目が覚めた。」

留意すべきは、ミラーを目覚めさせた大いなる叫びが「喜び」によって力づけられていたことである。「喜び」は、ヨエル書において「新しいぶどう酒」を有する者たちの象徴であり、「恥」は、新しいぶどう酒から断たれ、他のぶどう酒を飲む者たちの上にある。ミラーを目覚めさせる真夜中の叫びは、ちり払いの男が宝石をより大きな櫃に投げ入れた後に続く。そのより大きな櫃は、塵芥からより分けられ、その櫃に投げ入れられた宝石で満たされており、それは十四万四千人の神殿であると同時に、真夜中の叫びのメッセージでもある。その神殿は、第二の布告、すなわち第二の天使、すなわち第二の試練とオメガの試練の時に完成する。ミラーの夢においては、天の窓が開かれるときに、オメガの試練が表象されている。

また私は聞いた。おびたしい群衆の声のように、多くの水の響きのように、また力ある雷鳴の響きのような声が、こう言っていた。「ハレルヤ。全能の主なる神が王として統べ治めておられる。私たちは喜び歓喜し、彼に栄光を帰そう。子羊の婚姻の時に来て、その花嫁は自らを整えたからである。」そして、彼女には、清く白い、上質の亜麻布を身にまとうことが許された。というのは、その亜麻布は聖徒たちの義だからである。そして彼は私に言った、「書き記せ。子羊の婚宴に招かれている者たちは幸いである。」さらに彼は私に言った、「これらは神の真実の御言葉である。」

ヨハネの黙示録 19:6-9

1844年10月22日に、「キリストの四度の来臨」が成就し、それら四つの来臨のそれぞれは、間もなく到来する日曜法において、さらに完全に成就する。彼は契約の使者として来られ、マラキ書3章におけるレビ人の精錬と清めを成就された。彼はダニエル書7章13節の成就として、王国を受けるために来られた。彼はダニエル書8章14節の成就として、聖所を清めるために来られ、また、婚姻にも来られた。婚姻は、花嫁が自らの備えを整えたときに行われる。

「『実がなると、彼は直ちに鎌を入れる。収穫の時が来たからである。』キリストは、ご自身が御自分の教会のうちに現されることを、切なる願いをもって待っておられる。キリストの品性が御自分の民のうちに完全に再現されるとき、彼は彼らを御自分のものとするために来られる。」『キリストの実物教訓』69頁。

靈感によれば、日曜法の危機の際、神の印を有する「男女を目にする」ことによるのみ、「世界は警告され得る」。

聖霊の働きは、世に罪と義と裁きとを悟らせることである。世が警告を受けることができるのは、真理を信じる者たちが真理によって聖められ、崇高で聖なる原則に従って行動し、神の戒めを守る者とそれを足で踏みこむ者との間の境界線を、高尚な意味において示しているのを見ることによるのみである。聖霊による聖化は、神の印を持つ者と、偽りの安息日を守る者との違いを明確にする。試練が来るとき、獣の刻印が何であるかがはっきり示される。それは日曜日を守ることである。真理を聞いた後でもなおこの日を聖なるものと見なして守り続ける者は、時と律法を変えようと考えた罪の人の印を帯びている。聖書訓練学校、1903年12月1日。

花嫁が身を整えるとき、刈り入れの時が来る。刈り入れは、揺祭の標旗として掲げられる小麦の初穂の供え物がひとつに集められることから始まる。まず、初穂、すなわち『黙示録』に記された十四万四千人が集められ、その後、ほかの群れ、すなわち大群衆が続く。その標旗は彼の力ある軍勢であり、その力ある軍勢は純白の亜麻布をまとっている。婚姻において、日曜法の裁きに先立って、十四万四千人の神殿が完成し、その神殿はミラーのより大きな宝石箱であるのみならず、預言の霊を含むすべての賜物を備えた勝利の教会でもある。

私は彼を拝もうとして、その足もとにひれ伏した。すると彼は私に言った。「そんなことをしてはならない。私はあなたや、イエスの証しを持つあなたの兄弟たちと同じしもべである。神を礼拝しなさい。イエスの証しは預言の霊なのだから。」ヨハネの黙示録 19章10節

十四万四千人とはイエスの証しを有する者たちであり、またイエスの証しは、聖書と証の霊の双方において、「行に行を重ねる」かたちで示されている。十四万四千人のラオデキア運動が十四万四千人のフィラデルフィア運動へと変容するとき、彼らは皆、自らの証しを提示するために、「行に行を重ねる」という方法論を用いるであろう。その証しは、神的な血と人間の証言との結合である。

彼らは、小羊の血と自分たちの証しの言葉によって彼に打ち勝ち、死に至るまで自分のいのちを惜しまなかった。ヨハネの黙示録 12:11

神性の血と結合した人性の証しこそ、モーセと小羊の証しである。モーセは人性であり、オメガなる小羊の神性の血に対するアルファであった。花嫁が自ら備えを整えるやいなや、すべての賜物は回復され、白い亜麻布をまとった強大な軍勢として、彼女は主の前進する軍勢の旗印としての位置を占める。その戦いの行進は、花嫁が備えを整え白い衣をまとわされるときに始まるが、それは、ミラーの夢においてそうであったように、天の窓が開かれる時である。

そして私は、天が開かれたのを見た。見よ、白い馬があった。その上に座している方は「忠実、また真実」と呼ばれ、義によって裁きを行い、また戦いをなさる。その目は燃える炎のようであり、その頭には多くの冠があり、また御自身のほかだれも知らない名が記されていた。血に浸した衣を身にまとい、その名は「神のことば」と呼ばれている。天にある軍勢は、白い馬に乗ってその方に従い、白く清い細布の衣をまとっていた。その口からは鋭い剣が出ており、それによって諸国民を打つ。鉄の杖をもって彼らを牧し、また、全能の神の激しい憤りと怒りの酒ぶねを踏みつける。そしてその衣とそのももには、「王の王、主の主」と記された名がある。黙示録 19:11-16。

塵払いの男が空の部屋に入り、窓を開けると、彼は宝石を拾い集め、それらをより大きなオメガの小箱に投げ入れる。ジェームズ・ホワイトは、それらの宝石を神の民と同定するだろうが、ウィリアム・ミラーは、象徴には複数の意味があるとあなたに告げ、さらに、その宝石は、散らされた土台となる諸真理を表すのみならず、キリストの栄光の御国を表して高く掲げられる冠の上にある散らされた宝石も表していると述べるだろう。

その日、彼らの神である主は、ご自分の民の群れのように彼らを救われる。彼らは王冠の宝石のように、主の地に掲げられる旗印のように高く掲げられる。ゼカリヤ書9章16節

ローマによる異象の確立という基礎的アルファの試験に続く、オメガにして第二の試験は、頂点となるオメガの試験である。

それは、裁きに関する第三の試金石に先立つ、神殿の試験の完結である。この試験は、二種の礼拝者を互いから清め分かち、油、すなわちメッセージ、あるいはホワイト姉妹がカペナウムの会堂に関する注解において「真理の言葉」と規定したものに基づいて、賢い者と愚かな者を分離する。

カペナウムは、ヨハネ6章66節において、イエスが一度に最も多くの弟子を失い、その者たちが二度と戻らなかった場所である。キリストの時代における弟子道の最大の試練としてのカペナウムは、キリストの時代のオメガの弟子道試練の象徴であり、さらにそれは、2023年に始まった三段階の試験過程におけるオメガの弟子道試練を予表する。カペナウムにおいて、その試練は天からのパンによって表象され、イエスが自然的事柄について語る時、それを霊的適用として理解すべきであることを受け入れようとしなかったがゆえに、預言を理解できなかったという文脈において、ユダヤ人の失敗を明らかにした。

これらの内容は次回の記事で続けます。

会堂における「いのちのパン」に関するキリストの説教は、ユダの歴史における転機であった。彼は、「人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたがたのうちいのちはない」という言葉を聞いた。ヨハネ6:53。彼は、キリストが世的な益ではなく霊的な益を差し出しておられることを悟った。彼は自らを先見の明ある者と見なし、イエスは榮譽を得ることはなく、また御自分に従う者たちに高位を授けることもできないと考えた。彼は、いつでも身を引けるよう、キリストにあまりにも密接には結びつかないことを決意した。彼は注視するつもりでいた。そして注視した。

その時以来、彼は弟子たちを困惑させる疑念を表明するようになった....

第一の試練

イエスが利己的なユダに投げかけたまなざしは、主が彼の偽善を見抜き、その卑劣で軽蔑すべき性格を見通しておられることを、彼に悟らせた。これは、ユダがそれまでに受けたどの譴責にもまさる、より直接的な譴責であった。彼はそれに憤激し、こうしてサタンが入り込んで彼の思いを支配する扉が開かれた。悔い改める代わりに、彼は復讐を企てた。自らの罪を知った痛みに刺され、またその罪責が知られたことに狂気にまで駆り立てられて、彼は席を立ち、大祭司の官邸へ行き、そこで評議会が集まっているのを見いだした。彼はサタンの霊に満たされ、理性を失った者のように振る舞った。主を裏切ることへの報酬として約束されたのは銀三十枚であった。そして、香油の壺の代価に比べればはるかに少ない額で、彼は救い主を売り渡した。

「精神と行為において、多くの者はユダに似ている。彼らの品性にある疫病の病巣について沈黙が保たれている限り、公然の敵意は見受けられない。しかし、彼らが譴責されると、苦々しさが彼らの心を満たす。」 Youth Instructor, 1900年7月12日.

第二の試練

「過越の祭りの前に、ユダは祭司たちと律法学者たちと二度目の会見を持ち、イエスを彼らの手に引き渡す契約を締結した。……いまやユダは、キリストが弟子たちの足を洗われた行為に憤慨していた。もしイエスがこのようにご自身を低くされるのなら、イスラエルの王であり得ない、と彼は考えた。地上の王国における世俗の栄誉への一切の希望は打ち砕かれた。ユダは、キリストに従っても得るものは何もないと確信した。彼の見解では主がご自分を貶められたのを見てから、彼は主を否認し、自分は欺かれていたと告白しようとの決意をいよいよ固めた。彼は悪霊に取りつかれており、主を裏切るといふ、すでに取り決めた業を完遂することを決意した。」 『The Desire of Ages』 645頁.

最終決定

自らの企てが露見したことに驚愕し狼狽して、ユダは急ぎ立ち上がり、部屋を立ち去ろうとした。「そこでイエスは彼に言われた、『あなたのしようとしていることを、速やかに行え。』……彼は一口のパンを受けると、直ちに外へ出て行った。時は夜であった。」キリストから背を向けて外の暗闇へと赴いたこの裏切り者にとっても、夜であった。

この一歩が踏み出されるまでは、ユダは悔い改めの可能性を越えてはいなかった。しかし、自らの主と仲間の弟子たちのもとを去ったとき、最終的な決定が下されていた。彼は境界線を越えていた。

イエスが、この誘惑に陥った魂を扱われるにあたって示された忍耐は、実に驚くべきものであった。ユダを救うためになし得ることで、なされずに残されたものは何一つなかった。彼が二度にわたり自らの主を裏切る取り決めをしたのちにも、イエスはなお彼に悔い改めの機会をお与えになった。裏切り者の心に秘められた意図を見通すことによって、キリストはユダに、ご自身の神性を立証する最後の決定的証拠をお与えになった。これはその偽りの弟子にとって、悔い改めへの最後の召しであった。神人両性を備えたキリストの御心がなし得る訴えは、一つとして差し控えられなかった。頑

なな誇りによってはね返された憐れみの波は、心を屈服させる愛の、いっそう強い潮となって再び押し寄せた。だが、自らの罪が暴かれたことに驚き恐れはしたものの、ユダはいよいよ決意を固めた。彼は聖餐の席から、裏切りの業を遂行するために出て行った。

キリストがユダに対して災いを宣告されたとき、そこには弟子たちに対する憐憫の目的も含まれていた。こうして、キリストはご自身のメシア性の決定的証拠を彼らに与えられた。イエスはこう言われた。「事の起こる前に、わたしはあなたがたに告げる。事が起こったとき、あなたがたが、わたしが『I AM』であることを信じるためである。」もしイエスが、ご自身に降りかかろうとしていることについて無知であるかのごとく沈黙しておられたなら、弟子たちは、自分たちの師には神的な先見がなく、不意を襲われ、裏切られて、殺意に満ちた群衆の手に渡されたのだと考えたかもしれない。その一年前、イエスは弟子たちに、十二人をお選びになったが、そのうちの一人は悪魔であると告げておられた。今や、ユダに向けられたイエスの言葉は、彼の裏切りが師によって完全に見抜かれていたことを示し、キリストが辱めを受けられる間、キリストの真の弟子たちの信仰を強めるはずであった。そして、ユダがその恐るべき最期に至ったとき、彼らは、裏切り者に対してイエスが宣告された災いの言葉を思い起こすであろう。『The Desire of Ages』653-655頁。